

237) 愛の終わるとき

まっ暗闇 <small>くらやみ</small> がとても恐くて	灯 <small>あか</small> りを点 <small>つ</small> けて眠ってたころ
自分の夢はどんなことでも	きっと叶 <small>かな</small> うと想っていたの
そんなわたしが大人になって	叶わぬ恋の苦しさ知った
少女時代の夢は破れて	季節 <small>とき</small> の流れに押し流された
優しく街を包む夕映え	わたしの心吸い込まれそう
電車に乗って川を渡れば	あの人のことまたよみがえる
過ぎし思い出拾い集めて	心の奥をたどってゆけば
誰もいない秋の砂浜	駆け抜けて行くふたりが見える
ふたりすごした部屋に帰れば	やがてあなたも戻る気がして
薪ストーブをまっ赤に燃やし	ロシアンティーを沸 <small>わ</small> かして待つ
人の気配が窓の向こうを	近づいてきて遠ざかってく
あなたの匂 <small>にお</small> い残るベッドに	顔を埋めて涙にくれた
どこにでもある愛だったけど	心 <small>こころ</small> 預けて愛し合ってた
ただ運命に遊ばれたけど	ふたりの心 嘘はなかった
ゆっくり過ぎる時間 <small>とき</small> の流れは	今夜も更けて明日へと向かう
愛の終わりは誰も見えない	筋書 <small>すじ</small> きのないドラマだったの